

# 星はやさしく光っていた

(ある中学教諭の手記より)

小学6年生のお子さんをお持ちのお母さんが、声をつまらせながら私に電話をかけてこられました。そのお母さんは私のよく知っている人で、大きな病院に勤めていらっしやいます。その日もくたくたになりながら、防護服をぬぎ、フェイスシールドをはずして、病棟をはなれたときには、星空がともきれいだっただろうです。星々のやさしい光を感じながら、今日一日精いっぱい患者さんのために責任を果たしたという誇りを感じたといっています。それなのに家に着くと、ぐったりとした表情で娘さんが涙をぬぐっていたそうです。小学校に通う娘さんは、学校の再開をととても喜んでいました。「友だちと会える」と、うれしそうに登校する姿をお母さんは見送りました。

教室で娘さんたちが先生にたのまれて配布物をくばっていた、その時です。

「あつ、さわっている」という声が聞こえてきました。最初はコロナウイルスに感染しないために、他人のものはさわらないで、という意味かと思ったそうです。しかし、休み時間に手を洗っているし、他にも先生にたのまれてくばっている子がいるのに、なぜ、私にだけ、とすこし不安になったそうです。

やがて、その意味が分かりました。後ろのほうから小さい声で、「ばいきんがうつる」、「ニュースになった感染症の人がいる病院にお母さんが勤めているらしいよ」という声が聞こえてきたのです。

「なんで」「どうして、ばいきんよばわりされないといけないの」。「お母さんは命をかけて必死で働いているのに……」。娘さんは腹の奥底から怒りがわいてきたといっています。それでも何も言えずに、帰ってきたというのです。

お母さんはその話を聞いたとき、自分の顔が青ざめていくのを感じたそうです。

「娘さんになんと声をかけられたのですか」電話口で私はお母さんにたずねました。

「今日、帰ってくるとき、夜空の星がともてもきれいだっただよ」。「お母さんはこうして家に帰っているけれど、直接患者さんと長い時間いっしょにいる医りよう関係者の中には、家族にうつすのが心配で、ずっと帰らずに働いている人もいるんだよ」。

「……星はやさしく光ってくれていた……感染している人もしていない人も、私もあなたもまわりの友達も、みんな地球の中の人なのにね……」。

それ以上のことは何も言えず、しばらくは声も出ないような状態だったそうです。

私はお母さんと話した後、娘さんと話がしたくなり、変わっていただけのように依頼しました。窓越しに星空を見つめながら……。

